



Q27

猫の天気ことわざ

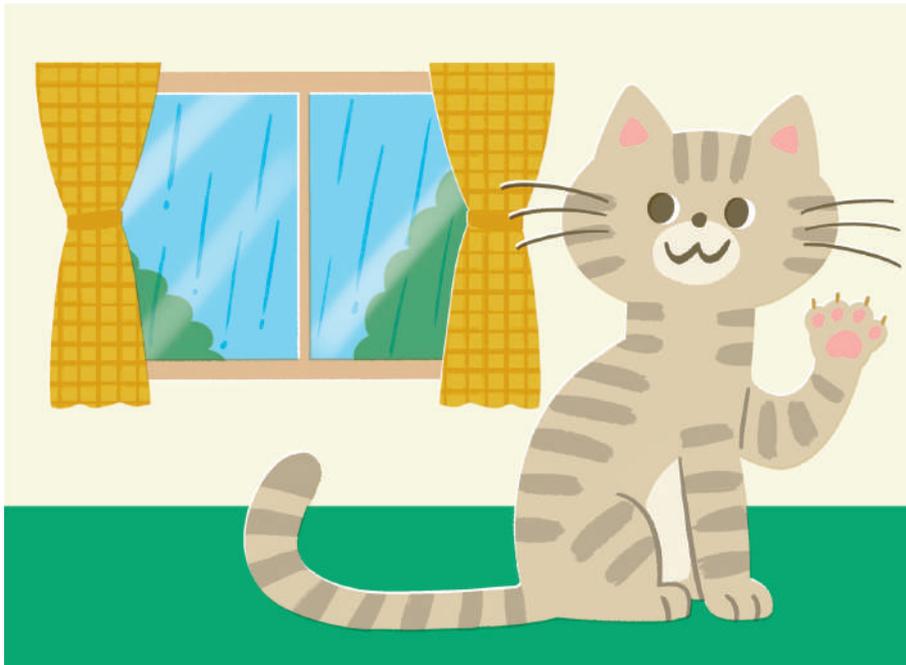
天気にかかわる猫のことわざは多いよ。●●に入ることばは？

① 秋の雨が降ると猫の●●が三尺にのびる

ア 顔

イ 爪

ウ しっぽ



ヒント

猫は、秋の雨を喜ぶそうだよ。

② 猫が●●を洗うと雨

ア 頭

イ 顔

ウ しっぽ



③ 猫の●●は風のきざし

ア あくび

イ 爪とぎ

ウ 出むかえ



秋

Q27.猫の天気ことわざ

A ① ア 顔 ② イ 顔
③ イ 爪とき

猫の動きで天気を予想することわざがたくさんあります。昔からわたしたちにとって身近な動物だということですね。

秋に雨が降るときは南から暖かな空気が流れこむことが多いので、寒がりな猫が顔をのぼして喜ぶといわれています。三尺はおよそ90cmですから、相当なのび方ですね。

「猫が顔を洗うと雨」は、猫のことわざの中でもいちばん有名です。猫のひげは、わずかな空気の振動も感じられるほど敏感なセンサーになっているそうです。もしかしたら雨が降る前の湿気や気圧をひげで感じて顔を洗っているのかもしれませんが、ご飯の後には顔を洗う習性があるそうですから「必ず天気に関係ある」というわけではないようです。

そのほかのことわざは根拠があるかどうかあやしいものもあります。みなさんのまわりの猫のようすと天気の間関係を観察してみるのもいいかもしれません。

【そのほかの猫の天気ことば】

- ・猫がのどを鳴らすと晴れ
- ・猫が水浴びすると晴れ
- ・猫が屋根を通ると晴れ
- ・猫がおしりをなめると雨
- ・猫が顔をかくして眠ると雨
- ・猫があお向けに寝ると雨近し



Q28

水滴が知らせる天気

ことわざ「朝、●●に水滴がついていたら晴れ」。
●●に入ることばは？

A くもの巣



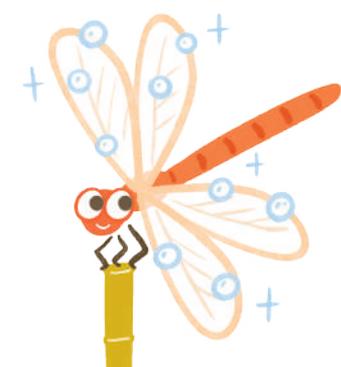
I はちの巣



ウ ありの行列



エ とんぼの羽



Q29.お月見の言い伝え

A

① ウ ② イ

中秋の名月というのは、秋の真ん中の月のお月さまのことです。昔のカレンダーでは7月・8月・9月が秋でした。このど真ん中、8月15日（十五夜）の月のことを中秋の名月とよんで、お月見をします。平安時代に中国から伝わった風習といわれています。ところが、昔の8月15日ごろというのは今でいう9～10月ごろ。台風や長雨の季節で、月が雲に隠れて見えなくなってしまうことがよくあります。江戸時代の書物には「十年に九年は見えず」と書かれていました。昔は十五夜だけでなく、およそ1か月後の9月13日の「十三夜」にもお月見をしていました。このころになると台風の影響なども少なくなり、月がきれいに見えることが多かったため、「十三夜にくもりなし」といわれていました。



鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇（1288 - 1339年）が吉野（奈良県）の皇居で催した月見の宴のようす。お月見は、古くから宮中などで行われていた。

楊洲周延画『吉野皇居月見御筵之図』（国立国会図書館デジタルコレクションより）

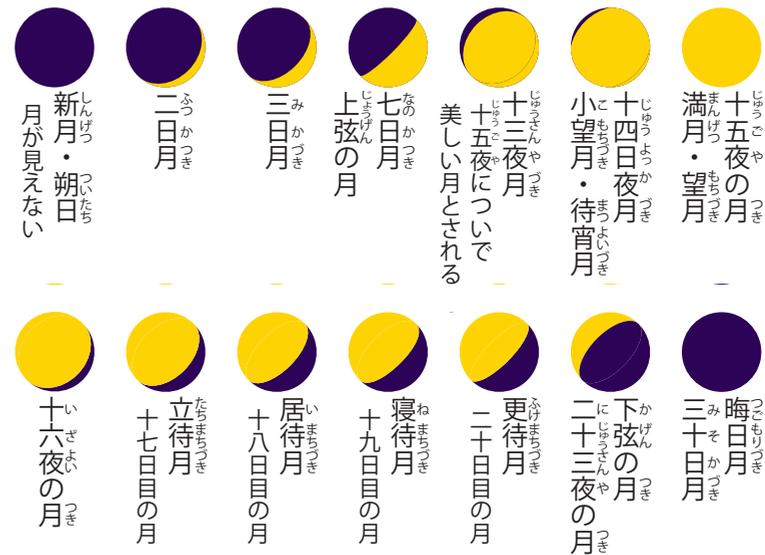
\\ お月さまのよび名 //

三日月とか上弦の月といった、月のよび名を聞いたことがありますか？

月の見えない新月を1日目として、3日目の細い月のとを三日月とよびます。今のように電気がない時代、日が暮れると月明かりが恋しかったでしょう。日々変化する月をながめることで、夜を楽しんでいたのかもしれませんが。

満月の翌日は「十六夜」と書いて「いざよい」と読みます。「いざよう」とは、ためらうという意味です。満月の日よりも少し遅れて、ためらうように月がのぼってくるのが由来です。その後は日に日に月の出が遅くなることから、立って待ち、座って待ち、寝て待ち、夜更けまで待ち…と名前がついています。

●月の満ち欠けとよび名



Q28. 水滴が知らせる天気

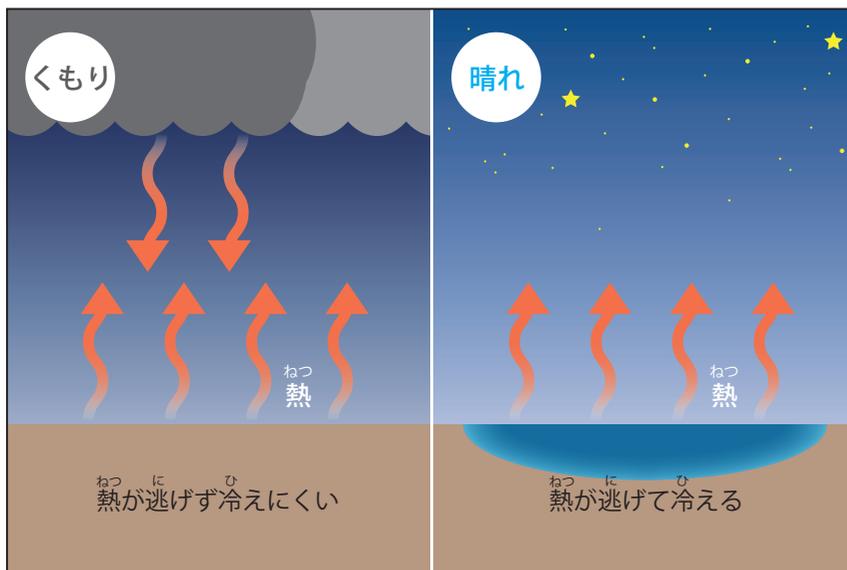
A

ア くもの巣

昔の人は、「朝、くもの巣に水滴がついていたら晴れ」と予想しました。昼間は太陽からもらう熱で気温が上がります。太陽がずみ夜になると、熱は空に向けて逃げていきます。次の日に太陽がのぼってくるまで熱が逃げつづけるので、朝日がのぼる直前がいちばん寒くなるのです。これを「放射冷却」といいます（→28ページ）。

夜の間に持っている、雲がかけ布団のような役割をします。熱が逃げにくくなって、朝があまり寒くなりません。ところが夜の間に雲がないと、かけ布団なしで寝ているようなもの。どんどん寒くなります。寒くなると、霧が出たり朝露が降りたりして、くもの巣に水滴がつくのです。

寒くて、くもの巣に水滴がつくような朝は、空に雲が少ない朝。つまり昼間は晴れると予想できます。



忍者も「観天望気」

「くもの巣に水滴がついていたら晴れ」のように、生き物のようすや自然現象を観察して天気を予想することを「観天望気」といいます。これを活用していたのは、天気に左右されやすい農家や漁師さんだけではありませんでした。

暗闇にまぎれて忍びこんだり、人に見つからないように隠れたりする、忍者です。たとえば、物音がかき消される雨の日が忍びこみやすい…など、天気を予想することが大切だったので、『万川集海』という忍術書には、「風雨の占い十六か条」がまとめられています。なかには「星の光がゆらいで止まらないときは三日以内に大風が吹く」とか「太陽に暈がかかれば雨」など、今もよく耳にする観天望気が書かれていますよ。

忍者は、予想するだけでなく自然をよく観察していました。なかには自然現象を利用して身を隠す「天道」という技もありました。雨遁、雷遁、霧遁、星遁、日遁、雪遁、風遁、電遁、雲遁、月遁があり「天道十法」とよばれました。

